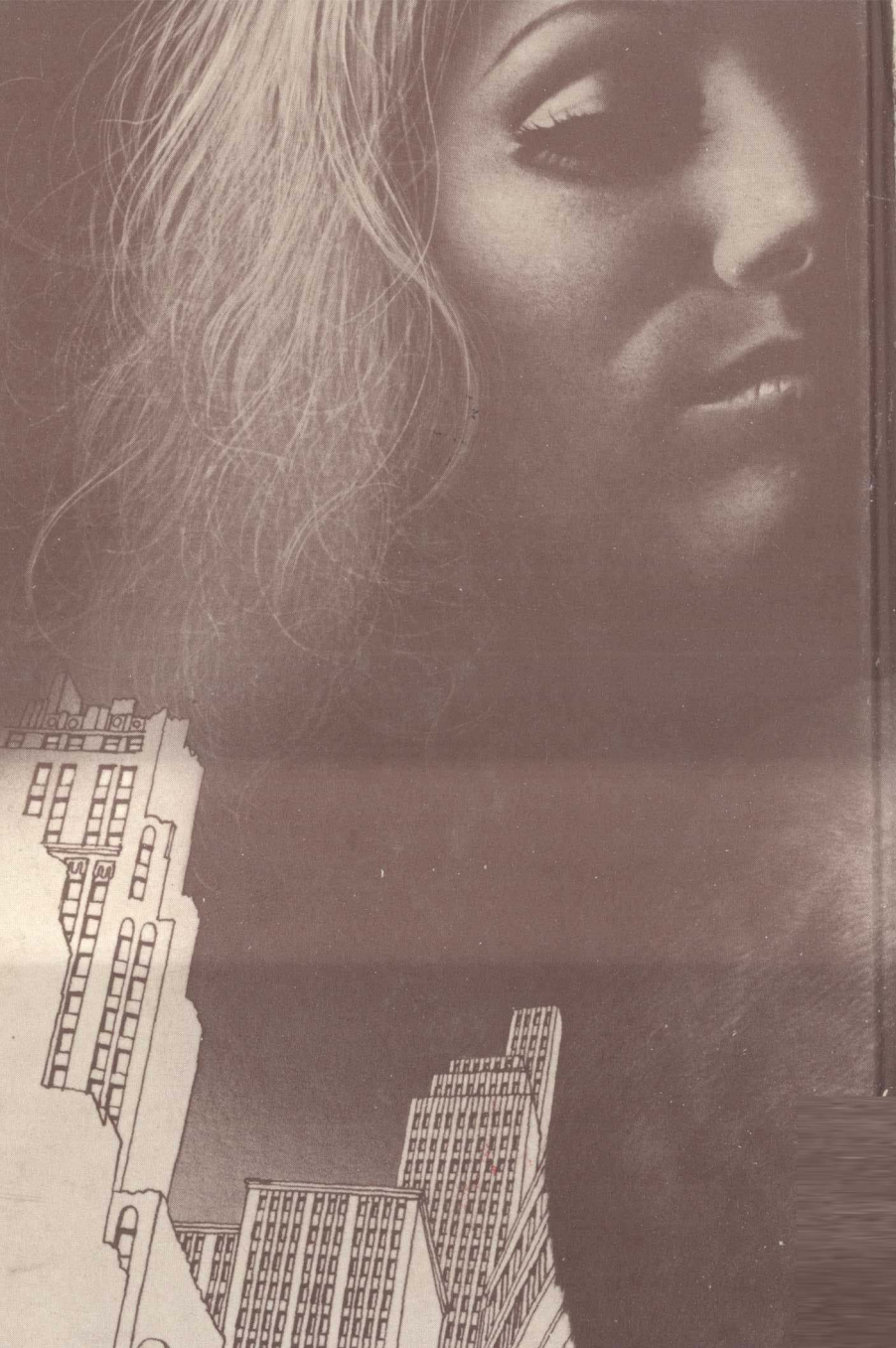




小林久三 錆びた炎

さ ほのお
錆びた炎



昭和52年 1 月10日 初版発行
昭和52年 1 月30日 再版発行

著 者 小林久三

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102
電話（東京）（265）7111 〈大代表〉 振替 東京3-195208

信教印刷・大口製本

©Printed in Japan

0093-872178-0946(0)

錆^さびた炎

裝
幀

辰
巳

四
郎

目次

プロローグ	虚無の群泳		五
第一章	夢魔の誘拐	——四月十三日午後二時二十二分	一六
第二章	声の触手	——四月十三日午後八時二十二分	五
第三章	闇の不協和音	——PART I	一六
第四章	シャム猫と鳥カゴ	——四月十日午前九時二十二分	二三
第五章	地下を走る迷路		一五
第六章	闇の不協和音	——PART II	三〇
第七章	魔の夜	——四月十四日午後八時二十二分	二八
第八章	失われた座標	——四月十五日午後二時	二五
エピローグ	虚無の炎		二六

プロローグ 虚無の群泳

レンズの焦点が、びたりとその女に合わされた。

頬の削げた蒼白い顔だった。乾いた暗い目をしている。目のなかに、なにかちいさな熾火ほきびのようなものがちらちらと揺れている。ささくれだって、血の氣のない唇。

双眼鏡は、女の顔を容赦なく撫でまわす。

レンズのなかいっぱいに、女の顔の部分が拡大されて大写しになるため、遠近感が失われて、全体の感じがとらえにくい。

レンズはなめるように女の顔から首筋をとらえた。白くほっそりとした首だった。静脈が青く透すきみえる。

つづいて、レンズは女の胸から腰へと降りていく。濃い葡萄色ぶどういろのワンピースを着ているようだった。ほっそりとしたからだつきの割りには、胸はゆたかだった。パットでごまかしているのではない。その証拠に、その胸は半円を描くように微妙に揺れている。

しっかりと張った腰から脚のほうに、レンズはゆっくりとさがっていく。左手にぶらさがったものをとらえたとき、レンズはびたつと静止した。

レンズのなかに、なにか異様なものが拡大されて映し出された。黄玉トパーズのように光るものがあつた。その光るものは、わずかに収縮しながら魅惑的な光をはなっている。

瞳孔どうこうだった。

通りのあかりがまぶしいのだろう。その双眸は凸型にほそめられながら、油断なく左右に向けられている。全身は、つややかな灰白色の体毛でおおわれている。

シャム猫のようだった。

それにしても、シャム猫をいれた容器が奇妙だった。レンズのなかには、水色の線が格子状に走っている。シャム猫は、その線の向こう側にいるようである。

不意に、レンズが反転した。

これまでとは逆に、女の姿がズーム・バックしたように遠のいた。焦点距離の長いレンズから短いレンズに切りかえられたのである。

細密画ふうにとらえられていた女の顔が、急速に後退し、全身像でうかびあがった。女は、左手に水色の鳥カゴをぶらさげていた。シャム猫は鳥カゴのなかに閉じこめられているのだ。

鳥カゴをぶらさげた女は、やや姿勢を前傾させるようにして歩いていく。

レンズのなかには、女の背景が書割りのように映し出された。街路樹。ブティック。喫茶店。白いビル。

ゆるやかな坂道だった。

あたりにはすでに夕闇の気配がたちこめている。

坂道の人波が埋めはじめた。

レンズはしかし、執拗に坂道を降りていく鳥カゴをもった女ひとりに向けられていた。

遠景でとらえる女の顔は、ひどく美しいようだった。年齢も若そうである。二十二、三歳だろうか。

「妙な女だな」

双眼鏡をのぞく男が呟いた。しわがれた低い声だった。

シャム猫を鳥カゴのなかにいれて歩く。愛玩用の犬や猫を連れて歩くとすれば、バスケットかなにか

に連れて歩くのが常識だろう。

女は、その常識を無視した。

常識をあえて無視したその若い女には、どこかエキセントリックな魅力があるようだった。けっして、シャム猫をいれた鳥カゴが違和感とはならない。逆に、ひどく新鮮なアクセサリーのようにみえるのである。それを計算しているとすれば、女のセンスは高く評価してよさそうだった。

へそうはおもえない

男は頭のなかで独り言をいった。

女の表情には、なにか気になるものがあつた。気になる点を具体的に指摘できるわけではない。強いといえば、目のなかに揺れている暗い火のようなもの、そして粉をふき、土気色にちかい肌の色が、なんとなく異様な感じをあたえるといえまいだろうか。

女は待ち合わせでもしているのだろうか。

三十メートル間隔くらいで、さっきから同じ場所をいきつもどりつしている。

待ち合わせにしては、奇妙だった。

女は時間を気にするわけでない。雑踏に目を向けるのでもない。ショウウィンドウをのぞくわけでもなかった。ただ漫然と同じ場所を、単調な機械の運動のように往復しているだけなのだ。

へ娼婦か

男はそうおもった。瀟洒なスーツをまとった女が、あてもなく舗道を歩いている。通りがかりの男が、女に口をかける。二人のあいだにかわされる短い会話、場面は一転すると、薄暗い部屋のベッドのうえで、二人は抱き合っている。そんな情景を、外国映画かなにかでなんどもみたような気がする。

鳥カゴをぶら下げたあの女も、映画のなかの女と同じように自分の肉体を売って暮らしている女性なのだろうか。通行人のだけれど、彼女に目をとめ、ラブホテルにいとささやきかけるのを待っている

るのかもしれない。

双眼鏡のレンズごしに女の動きをじっと見守りながら、男は一瞬息をつめた。

男は頭のなかで、鳥カゴの女の衣服に手をかけて引きちぎるようにむしりとった。つづけて下着を引き裂く。そして女を床に突き倒し、彼女の脚を鈍角に押しひろげる。女は両手をつ張って抵抗しながらも、やがて射抜かれた鳥のようにからだを震わせ、動きをとめる。いったん動きをとめた女は、まもなく激しく律動しはじめる。のけぞり、あえぎながら、切れぎれに叫ぶ。

「殺して……！ わたしを！」

男は、女を犯す場面を想像しながら、頭のなかに赤い斑点はんてんのようなものが現われ、その斑点は無限に核分裂していくように増えつづけていくのを覚えた。これまで、どの女にも感じたことのない感覚だった。

男は双眼鏡に目をこらした。

レンズのなかの女を、いつ果てるともなく犯しつづける。

これは、男にとって夕刻のひとつとき、毎日かならず行なり、一種の儀式のようなものだった。場所は、坂道に面して立った五階建てレストラン最上階の更衣室にきまつていた。朝十時からの仕事が終わわり、仕事着をぬいでふだん着に着がえるとき、窓ぎわから双眼鏡で真下の通りを眺める。

雑踏のなかに、これはとおもう女をひとり探しあてる。その女をレンズでとらえつづけながら、頭のなかで犯していく。犯す状態は、毎日、異なっていた。店長をはじめ先輩や客に怒られたり、不愉快な目に遭った日は、恐ろしく侮辱的なやりかたでレンズのなかの女を犯す。いじめぬく。反対に、気分よかった日には、優しくレンズのなかの女を抱く。大切な恋人かなにかのように。

相手の女は、毎日、めまぐるしく変わった。

ある日は、太った若い女。次の日は、痩やせた中年の人妻ふう。そのあくる日は、未成熟の少女といっ

た具合に。

視線による強姦——いわば視姦といえた。

この行為を、だれも見咎めるものはなかった。取締まりの対象にもならなければ、文句をいうものもなかった。夜間勤務の連中が着がえにくるまでの数分間、男は自分のロッカーからとり出した双眼鏡で、視姦行為にふける。

その数分間だけが、二十四時間のなかで、もっともてごたえのある充実した時間のようになり、男にはおもえた。そのよろこびがあるため、渋谷の公園通りの一画にあるレストランにつとめているようなものだった。

視姦の習慣は、太子堂四丁目のアパートに下宿した去年の夏ごろからはじまったとおもう。路地の奥にある粗末な木造二階建てのアパートだった。二階北端の四畳半の一室の窓から、ある日、外をのぞいた。

その窓から、五十メートルほど先に立った巨大なマンションがみえた。白い尖塔が、空に突き刺さるようにそびえている。十六階建ての「カサブランカ・マンション」だった。

カサ・ブランカというのは、スペイン語で、「白い館」という意味だということを、男は知っていた。全室三LDK以上の広さで、冷暖房設備から地下駐車場までをそなえた超高級マンションらしい。

一室の最低分譲価格が三千六百万円だった。最高は二億円をこす。

へ三千六百万円へ

その数字が、男の頭のなかに奇妙なほど鮮かにきざみこまれていた。

へどんな連中が住んでいるのだろうかへ

男はそのマンションをみあげた。

無数の窓群には、カーテンがかけられていた。バルコニーにも人影はみあたらない。

ひとつだけ例外があった。

マンションの最上階に近い、十一、二階くらいの一室だろうか。その部屋のバルコニーに若い女の姿がかすめたようにみえた。

男の目に、その女は全裸にちかい姿のようにおもえた。女はバルコニーで仰向けに横たわったようだった。おそらく、寝椅子に寝そべって日光浴でもしているのだろう。

バルコニーの白い柵には、鉢植えの黄色い花が咲き乱れていた。全裸にちかい女の姿が、花のすきまからちらつとのぞく。

ひどく刺激的な眺めだった。

男には、外国の小説や映画に出てくるように、東京でもバルコニーで日光浴をする女がいるということとは、とても新鮮な発見だった。

注意してみると、その女は天気がいい日には、かならずバルコニーに全裸にちかい姿で現われた。
〈最低三千六百万円のマンションに住む女〉

男は、つとめの帰りに近くの三軒茶屋で、中古の双眼鏡を買ってきた。質流れの中古品で、倍率八倍の西独R社製の輸入品だった。中古品とはいえ、立体感や遠近の識別性は高い。値段は一万二千元。

双眼鏡で、バルコニーの女をとらえた。

美しい女だった。

肉感的な大きな唇をしていた。切れ長の目に、男を誘いこむような色気があった。量感のある肉体を、ビキニでつつんで、寝椅子に寝ころんでいる。一時間近く寝ころび、髪を手でかきあげながら、ゆっくり身を起こす。

男の目に、その女の肉体には三千六百万円の札束がぎっしり埋めこまれているようにみえる。

〈三千六百万円〉

法外なその金額をおもいうかべるたびに、名状しがたい怒りとむなしさのようなものが胸の底から衝きあげてくる。癒しがたい記憶がまつわりついている数字だった。

へ三千六百万円の女へ

レンズの中心に坐った女を、男は頭のなかで凌辱した。女にぶざまな体位をとらせ、おもいきり辱しめる。そのときだけ、男は背筋に冷たい風が吹き抜けていくような感覚のなかで、ある復讐感を味わった。

それが視姦に病みつきになる、そもそものはじまりだった。

アパートの二階の窓からのぞくことに、すぐあきがきた。なによりも、対象になる女の数がかざられていた。バルコニーの女だけでは、物足りない。マンションの窓は、他人の目を拒否するようにカーテンがかけれ、窓が閉められていた。路地を通る女の数もたかが知れている。

おもいついて、男は、双眼鏡を勤務先にもっていつてみた。今年のはじめのことである。

渋谷駅に近く、デパートの角を折れNHKの放送センターに向かう通りには、洒落た店が軒をならべ若い女性がつねに群れをなしている。

視姦の対象者にはこと欠かなかった。文字どおり、よりどりみりだった。

男はひとり陰微なたのしみにふけた。

アパートの四畳半に帰ってみても、なにをするわけではない。テレビをみる気にもなれなかった。本をひろげるのも億劫だった。酒を飲む習慣もない。親しい友人もいなかった。ぼんやりと濁った頭で、布団にくるまって深夜までFM放送をきく。べつに音楽に興味があるわけではなかった。ひとり暗闇のなかで、じっとしていることが耐えがたかったからである。

闇のなかで、目をひらいていると、一月前のあの事件のことがおもい出されてくる。そうになると、頭のなかが冴えて眠れなくなった。部屋中に不眠の気配がたちこめて、明け方まで一睡もできなくなるの

である。

それよりも、耳もとでたえず音楽が流れているほうが、はるかによかった。それはリズムを刻む音楽というより、記憶を過去にさかのぼらせないための、音波による一種の遮断幕シヤダンマクのようなものだった。

へそれにしても……

と、男は現実に戻ると、鳥カゴをぶら下げた女をレンズごしに凝視しながら口のなかで呟いた。

へ素敵な女だ！

ぜんたいに、なにか疲れきり、暗い翳かげのようなものを引きずっていることに魅ひかれた。
人妻だろうか。

それとも独身のOL？……

そのどちらでもないような気がする。

いちど女に話しかけてみたい、そんな衝動に男は見舞われた。これまで、レンズの女に直接しゃべりかけたことは、い子どもない。レンズをとおした交渉で、いつも満足してきた。

それが今日はちがっていた。

へどうせ、相手にされない

頭の隅で、そんな声がきこえる。

べつの隅で、ちがった声がひびく。

へおもしきって声をかけてみる。意外に女はついてくるかもしれない

男は激しくためらった。

双眼鏡をもち直して、ふたたび女の顔を拡大してみた。クローズ・アップされた女は、相変わらず放心したような表情をしている。

不意に女の顔が、レンズのほうをみつめた。

五階の窓から監視されていることに気づいたようだった。
男は一瞬どきりとした。

へまさか

そんな馬鹿なことが起こるわけがなかった。

カーテンのわずかな隙まから、双眼鏡を舗道に向けているのだ。

錯覚にちがひなかった。

だが、レンズのなかの女はこちらをふり仰ぐようにして、微笑^{ほほえ}んでみせた。唇の端をわずかに曲げただけの、もの憂げな暗い微笑。

男はおもわずその微笑に引きこまれそうになった。

たまらなく女に会いたい、とおもった。レンズをとおしてではなく、肉眼で女の顔をとらえ、女の声
をきいてみたい。

その衝動は、ますます強くなっていた。

男は双眼鏡を目からはなすと、重い溜息^{ためいき}をついた。さんざん迷ったすえに、彼はこれまでの禁忌^{タブー}を犯
して、視姦の女に接近しようと決意した。鳥カゴのなかにシャム猫をいれてもち歩く若い女に――。

.....

その夜、男が下宿にもどったのは午前零時を過ぎていた。

男は、ふだんと異なり浮きうきしていた。鼻唄が口をついて出た。「夜を逃がれて」。全米ヒットチャ
ート第三位にランクされている、ヒットソングだった。

いつもの習慣で、ラジオのスイッチをひねった。期待に反して、音楽は流れてこずに、歯切れのいい
男のバリトンがきこえた。

「……今日午後六時頃、渋谷道玄坂上の西急ホテルの十二階三号室で男の死体が発見されました。所持品から男の身許は、世田谷区豪徳寺の医師佐島晃三さん、三十二歳とわかり、渋谷署ではただちに捜査を開始しました。佐島さんの首には、ビニールのひものようなものが巻きつけられており……」

男はダイヤルをべつの局にまわそうとした。よくある殺人事件だった。殺人事件のニュースなど、いまの彼の気分にはもっともふさわしくないようにおもえた。

ダイヤルをまわしかけた。アナウンサーの声が低くなり、かわりに耳ざわりの雑音がきこえはじめた。男の指の動きが、突然、とまった。

「なお、ボーイの話だと、佐島さんと同行して部屋にはいった女は、シャム猫をいれた鳥カゴを手にかけていたといわれ、渋谷署ではその女性の行方を探しています」

雑音がまじり、ひどくききとりにくい声だったが、アナウンサーはまちががなく、

「女は、シャム猫をいれた鳥カゴを手にかけていた」と、いったはずである。

へあの女か」

男は眉をしかめた。冗談だ、とおもった。それもタチの悪い冗談にちがいない。あんな美しく、優しい女性が、殺人事件の犯人であるわけがないではないか。

へなにかのまちがいだ」

男は頭のなかで否定すると、煙草をくわえ、窓ぎわから闇を眺めた。視線の先に、あかりのともったマンションがみえる。昼間よりも、はるかに間近な感じだった。闇の虚空に光の城が架けられているような、そんな錯覚をおぼえた。

男は、ふとあの女はどんな家に住んでいるのだろうか、と考えた。シャム猫を鳥カゴにいれたあの女は、やはり目の前に傲然とそびえるマンションのような豪華な場所に住んでいるのだろうか。